

# 仏教音楽 人物伝

- 1 -

福本 康之

**野村 成仁** (1874 ~ 1947)

Seijin Nomura

楽壇の最前線から  
仏教界へ転じた俊英

## 讃仏歌への扉開き豊かな旋律を

その野村を仏教讃歌の道へと誘うのは、簡単なことではなかったでしょう。野村は、平安中学校(現、龍谷大学付属平安高等学校)に迎えられ、同43年に「讃仏歌」として作品を発表し始めます。それは、単なる仏教唱歌から讃仏歌へという、名称の変更ではありませんでした。

それまでの仏教唱歌は、歌詞こそバラエティーに富んでいましたが、多くは同じ旋律で歌われていました。対して野村は、歌詞の内容に合わせて、一曲ずつ新たな旋律を付けたのです。その結果、仏教讃歌の世界は、音楽的に大きな広がりをもせることになりました。

野村の遺した仏教讃歌は、それほど多くはありません。しかし、歌詞一語一語を吟味する中から生み出されたそのメロディーは、「みほとけにいたかれて」「追悼の歌」(詞・日曜学校同人)に代表されるように、今日でも色褪せることなく響き続けているのです。(本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室長)

仏教讃歌の歴史は、唱歌教育や賛美歌の影響を受けて、明治の中頃に発表された「仏教唱歌」に始まります。当時の取り組みは、有志による個々の活動だったのですが、新しい音楽は一人一人の情熱で徐々に浸透していきました。そして、宗門挙げての日曜学校運動が興隆をみせはじめた明治の終わり頃、仏教讃歌を取り巻く状況は、大きく変わります。仏教讃歌が、情操

教育の面から重視された結果、仏教讃歌活動が盛んになったのです。しかし本格的に隆盛するまでには、解決すべき2つの課題がありました。まず、作品が少ない。そして、教える人も少ない。つまりメロディーを生み出すと同時に指導者を探し出す必要があったのです。これらの条件を満たした人物が野村成仁でした。



平安中学校(現、龍谷大学付属平安高校)音楽教室の野村成仁

野村は、東京高等師範学校